JLTA Newsletter No. 54
日本言語テスト学会
The Japan Language Testing Association

JLTA Newsletter No. 54　　発行代表者：渡部良典　　2023 年 (令和 5 年) 3 月 31 日発行
発行所：日本言語テスト学会 (JLTA) 事務局
〒036-8560 青森県弘前市文京町 1
弘前大学教育推進機構教養教育開発実践センター
横内裕一郎研究室 TEL: 0172-36-2111（代表） e-mail: u16yoko@gmail.com URL: http://jlta.ac

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

言語テストの正義への問い

熊澤　孝昭（東洋大学）

近年，諸問題に対して社会正義が問われている。ここ一年の間も繰り広げられているウクライナ・ロシア戦争ではウクライナ・ロシア側ももちろんだが，それを取り巻く諸国の立場などの正当性が一方的に主張される状況が続いている。言語テスト関連の出来事としては，とある外部発信技能テストが高校入学試験として導入され，約7万人の高校受験生がそのテストを受けた。記憶に新しいが，2020年度より共通テストの外国語科目として，外部テストの利用が検討されたが，主に機会均等および格差原理の観点から取り止めになった矢先である。むろん，この入試制度には社会正義の観点からも異論が出ているのは周知の通りであるし，言語テストに関わっている方々には賛否について熟慮するに値する。

私事で恐縮だが，担当講義科目で履修生に対してリアクションペーパーを課しているが，高校入試として外部発信技能テストの導入に対しての賛否を問うた結果を興味深いので紹介したい。117名の有効回答者数のうち，「強く賛成する」から「強く反対する」の回答数はそれぞれ15，24，31，40，7名となり平均的には3となり「どちらとも言えない」との結果となった。賛成する立場のコメントとしては，ライティングであれば近年急激に利用が進んでいるAIなどがあるが，スピーキングは自発的な学習がある程度必要なため，スピーキングはグローバル化が進んだ社会では学ぶべき技能であるためなどの回答があった。反対する立場のコメントとしては，ネイティブ信仰が残る教育現場では，内円にあるアメリカ・イギリス英語の発音が「正しい」とされる中，そのテストの発話・発音を採点するのが外円にあたる東南アジア人であることから採点の信頼性が疑問，スピーキングも指導・学習することになることから教える側・学ぶ側の負担が増えないか，1000点満点中スピーキングの20点を判断するために多額の公的資金投入に疑問，そもそもペアワークなどの教室内での学習で効果的にスピーキング技能が伸びるのかが疑問などの回答があった。

教える側にとっては当然のことかもしれないが，評価基準およびテストを含む評価制度を設計し，使用するには，まず発案者である教える側が公平・公正に評価ができるよう，さらには効果的に学習がなされるよう設計し，シラバス等を用いて学ぶ側に評価基準およびテスト内容を説明する。そして，学ぶ側から同意を得られない部分などを調整する。テスト実施後，教える側は全体のスコアの傾向はもちろんのこと，テキスト中の出題箇所や解説などを行い，説明責任を果たす。そうすることで，学ぶ側が自らの到達度を確認し，結果の妥当性を検

証できるようにする。

さて，高校入試としての外部発信技能テストの導入および入試判定の判断材料としての使用は妥当で「正し」かったのか，このテストでの「正しい」発音，質問への回答，英語はなんなのであろうか，今後は諸事情により中止することが「正しい」のか，など正義についての疑問は尽きない。さらには，制度設計の段階では一方的ではなく，民主的かつ公正に決定されたのであろうか，決定のプロセスならびに検証がなされるよう結果は可視化されているのであろうかなど疑問が付きまとう。一方的に正当性を唱えても持続可能な制度になるかは全くもって不透明ではなかろうか。

Reports on
The 25th Annual Conference of JLTA
Nov. 5 (Sat) & 6 (Sun), 2022

Online (Zoom)

Theme: Teaching, Learning, and Assessment in CLIL

Keynote Speech
Assessment, Teaching, and Learning in CLIL: Challenges and Opportunities

Dmitri LEONTJEV
(University of Jyväskylä, Finland)

今回の基調講演はフィンランド，ユヴァスキュラ大学よりドミトリー・レオンチェフ博士を招き，内容言語統合型学習（CLIL：Content and Language Integrated Leaning）と教室内での評価を主なテーマとしたお話をいただいた。

ご講演では，評価と指導の繋がりの重要性について繰り返し強調されていた。タイトルにもあるが，評価，指導，学習をバラバラに論じるのではなく，繋がりを持たせて考えていくことが重要となる。レオンチェフ博士はこの点について“bridge”という言葉を用いて説明されていた。

研究者と教師，プロフェッショナルが話し合いながら，CLIL のなかでどのように評価を行うかについて検討を進めていかなくてはならない。この繋がりを重要なポイントとするならば，研究者の立場から助言をするだけではなく，研究者と教師とで意見を交わしながら実践的な方法を探らなくてはならない。

指導と学習についても考える必要がある。これらは同じプロセスをたどるものではない。指導＝学習とはならない。しかしここに評価の要素が加わることで，評価，指導，学習に繋がりをもたせることが可能となる。評価という視点が加わることにより，学習者にとって実際に何が学ばれているのか，教師は学習者に何を教えることができているのか，という情報を客観的に得ることができる。これが，指導と学習の調整を可能にするのである。

評価と学習を繋げることへの現場からの需要はあるものの，その実現方法となると課題も当然存在する。評価に関する教師のトレーニングを行ったとしても，それが実際の評価に影響をもたらすとは言い難い。教師側のアセスメント・リテラシ―の問題は少なからず存在しており，変化をもたらすまでには到達しない。やはりここでも，研究者，教師とのコミュニケーションが必要であり，共によりよい評価を考えていく必要がある。

ご講演後，フロアからは CLIL の実践に携わっている先生方からご自身の経験を踏まえた意見が共有され，レオンチェフ博士，および質問をされた先生方との活発な議論がなされた。

教室内でどのように評価を取り入れるか，という点は CLIL による指導を行う授業のみならず，多くの場面で言えることである。研究者の立場，教師の立場，両方の視点から適切な評価というのもの

探り，評価，指導，学習の橋渡しをしていかなくてはならない，ということを改めて考える貴重な機会となった。

報告者　高波　幸代（群馬大学）

Symposium

Theme: Teaching, Learning, and Assessment in CLIL: National and International Perspectives

Coordinator:

Makoto IKEDA
(Sophia University, Japan)

Panelists:

María Luisa Pérez CAÑADO
(University of Jaén, Spain)
Yuen Yi LO
(University of Hong Kong, Hong Kong)
Rachael RUEGG
(Victoria University of Wellington, New Zealand)

The theme of the symposium is Teaching, Learning, and Assessment in CLIL: National and International Perspectives. The CLIL (Content and Language Integrated Learning) has been gaining momentum regardless of country. The teaching method and its assessment are significant issues of CLIL, as CLIL places importance on comprehension of the contents. In the symposium, Ikeda, CAÑADO, LO, and RUEGG had presentations and discussed the present situation and the challenges across the countries.

Ikeda first presented the current situation of the soft CLIL classroom in Japan. He introduced the features of Japan's new Course of Study and its emphasis on 'cognition, decision, and expression.' Because assessment in 'cognition' is weak, he proposed solutions and ideas for the issue by referring to Bloom's taxonomy. He referred to the insufficient points of assessments in guidelines by MEXT and the new Common Test for University Admissions, and then presented some test samples by revisiting Bloom's taxonomy.

Second, CAÑADO from Spain talked about the CLIL in Europe. She presented an overview of the chief innovations, challenges, and ways forward for bi- and plurilingual education on the European scene. She showed five hurdles to clear in the European context, such as the CLIL implementation controversy and catering for diversity. She concluded that future pathways for progression will be mapped out to address these five niches, offering a broad array of materials and resources, methodological tips, etc. in order to rise to the challenges posed by bilingual education in Europe.

Third, LO from Hong Kong talked about the assessment literacy of CLIL teachers. She presented teachers' assessment literacy concerns about evaluating students' content knowledge and showed calls to re-examine the frameworks for assessment literacy. She teased out the complexities of assessment in CLIL and proposed a conceptual framework for

CLIL assessment literacy. She concluded that this new framework would establish a grounding for future research and have important implications for CLIL teacher education.

Last, RUEGG from New Zealand talked about assessment in Full-Degree EMI Programs in Japan. As assessment is an important element of EMI programs, she conducted research and introduced the results of the questionnaire used in her research. The questionnaire asked about the purposes of assessment and the kinds of assessments employed in Japan. From the questionnaire, she suggested that the language proficiency of students should be assessed for entrance and placement within EMI programs. She concluded by arguing that more comprehensive research is necessary for measuring learning in EMI Programs.

Reported by Shieru YAMADA (Graduate School, University of Tsukuba)

大会の印象

晴天の中，11 月 5 日土曜日にワークショップが始まった。オンラインでの学会参加にも慣れてきて，参加者も自宅から気軽に参加できたのではないだろうか。しかし，ワークショップではブレイクアウトセッションがあったため，寝間着で参加されていた方々は冷や汗をかいたのではないだろうか。そのワークショップでは，日本語教育を専門とされている先生方が多数参加されており，普段とは異なった意見や提案を聞くことができた。ただ，日本語も英語も言語には変わりないので，共通部分も多いのだと再認識できた。1 つ感じたことは，英語の発話評価よりも，日本語の発話評価の方があまり緊張せずできたことである。さすが母語である。

6 日日曜日の第 25 回全国研究大会では，岐阜信長祭りに負けず劣らず大盛況であった。10 件の研究発表があり，白熱した議論が交わされたと思う。また，約 50 名の参加者がいた基調講演とシンポジウムでは，フィンランド・日本・スペイン・香港・ニュージーランドから講演していただき，CLIL に関しての様々な国の見解や最新の情報を聞くことができたことは本当に価値あるものであった。CLIL の知識が乏しい私でも理解でき，考えさせられる点も多数あった。早朝から講演していただいた先生方もいらっしゃったが，対面・オンラインの学会というよりはハイブリッドで学会を行えば，海外から招待することが困難な先生方にも参加していただくことができ，各国の最新情報や研究を共有できるのではないかと感じた。次回の研究大会ではぜひこの点も考えていただきたいと思うと同時に，今回の大会にご尽力いただいた先生方に心より感謝を伝えたい。

古賀　功（龍谷大学）

Report on
JLTA Workshop
Nov. 5 (Sat), 2022

Online (Zoom)

What is the Language Assessment Literacy Required for Japanese Language Teachers?

Sukero ITO
(Akita International University)

2022 年 11 月 5 日にオンラインで伊藤祐郎先生によるワークショップが開催された。伊藤先生は日本語教育をご専門とされているものの，ワークショップ全体を通して，全ての言語教師が身に付けるべき，言語テスト作成において最も重要なリテラシーについて解説してくださった。受験中，受験者がさまざまな要因に惑わされず，自分の力をしっかりと発揮することができ，そしてできるだけ正確に評価対象とする能力を測定することができるよう，入念に準備することの重要性を，参加者は間違いなく学ぶことができたと思う。

ワークショップは休憩をはさみ 3 部で構成され，言語評価リテラシーを基に語彙，リスニング，そしてスピーキングテストの妥当性と信頼性を高めるポイントがそれぞれ演習を通して説明された。まず，言語評価リテラシーとは，1）評価方法や問題の設計，2）評価の実施，3）評価の分析・解釈，4）評価結果の活用，5）評価の事後報告という 5 つの観点を含む，テストの信頼性と妥当性を高める技能的知識であることが説明された。まず，語彙テスト作成のポイントとして，1 点目は語彙そのものに関する知識が挙げられた。例えば日本語であれば，その語彙が和語なのか外来語なのかなどについて十分に精通しておく必要がある。2 点目は，語彙の難易度に関する知識で，どのレベルの学習者にどの語彙が適しているのかを把握していることが重要である。3 点目が評価対象の語彙を根拠を持って選択できる知識であり，ある語彙をどんな目的で出題するのか，その意義を明確にしておく必要がある。最後に，例文を作る能力である。意図した正答の語彙以外が当てはまらず，文脈が明確な例文を作成する必要がある。これらの知識や能力を活用したテストづくりをすることで，受験者が正答を導く以外のところで悩んだり迷ったりしないような語彙テストを作ることができる。

第 2 部では，リスニングテストが取り上げられた。演習では実際に実施された過去のテスト問題が紹介され，それらがなぜ所謂「悪問」と呼ばれるのかについて解説された。ポイントはいくつかあるが，まずは問題そのものに真正性がなく，受験者にとって理解しにくいことである。例えば，音声で説明される部屋の様子と，問題用紙の部屋の写真を照らし合わせて間違いを当てるような問題は，実際の生活では起こりにくい状況であり，受験者を混乱させてしまう。また，スクリプトが短く，最初に回答の正否を左右する情報が含まれてしまう問題も，受験者に回答を諦めさせてしまうような問題である。万が一最初の情報を聞き取れなければ，あとは勘に頼るしか無いからである。最後に，スクリプトが不自然なことで起こる問題が取り上げられた。錯乱肢の情報までも盛り込もうとするなど，スクリプト内にさまざまな情報やヒントを含めすぎるとスクリプトが複雑かつ不自然となってしまい，受験者の問題に取り組む姿勢を阻害する。余計な細工をせず，場面や状況がわかりやすく，受験者が混乱しない問題づくりを心がけることが信頼性と妥当性を高める上で重要である。

第 3 部ではスピーキングテストについて解説された。スピーキングテストの基本は評価基準を作ることである。例えば「語彙」「文法」「流暢さ」など，そのテストの中で何を測定するのかを決定する。その後，3 段階，5 段階など，狭すぎず広すぎない適切な範囲で得点の段階を決め，さらにどんな重み付けにするかを考える。例えば正確性を重視するテストであれば，「流暢さ」よりも「文法」や「正確さ」の点数配分を高くする必要がある。しかし，これだけでは十分とは言えない。スピーキングテストの得点には，

テストの種類や方法，受験者の個人特性，ランダムな要素などからの影響がある。特に，発問内容や回答形式などを含むテストの方式はスピーキングテストにはとても大きな影響を及ぼすため，高い言語評価リテラシーが要求される。

伊藤先生が繰り返し述べていたように，受験者を余計なことで混乱させず，受験者が持つ本来の力を発揮できるようなテストづくりをする必要がある。我々言語教師は，言語評価リテラシーを高めることに務め，最良のテストづくりを目指す必要がある。

報告者　今野　勝幸（龍谷大学）

書評
Article Reviews

In'nami, Y., Mizumoto, A., Plonsky, L., & Koizumi, R. (2022). Promoting computationally reproducible research in applied linguistics: Recommended practices and considerations. *Research Methods in Applied Linguistics, 1*(3), 1–9. https://doi.org/10.1016/j.rmal.2022.100030

論文を執筆している際，ページ制限などの理由からどの情報を論文内に入れるか迷ってしまった，この情報も入れたいけどページ制限を超えてしまうので削除してしまった，などといった経験は誰もが持っているだろう。結果，解釈が困難になってしまったり，研究の透明性が薄れてしまったり，様々な不利益をもたらしている。また，1つの調査からでは，結果の一般化も困難だろう。これらの問題を解決してくれるのが，データやアンケートなどを共有し，再現可能にすることである。その再現可能性の必要性を議論しているのが本論文である。

本論文ではまず，データや解析コードといった補足情報を共有し，再生可能にすることの利点を挙げている。例えば，共有された情報を基に再現することによって，研究結果，結果の分析的頑強さ・信頼性など検証することができ，多くの情報にアクセスできれば包括的・結合的な研究（research synthesis）も可能になる。また，ある概念がどのように定義されたか，データがどのように集められたかも理解することができる。結果，より正確な再現可能性を検証することができる。それではこのような補足情報をどこに提示するかが問題になるが，本論文では 2 つの代表的な無料の保存場所を紹介している。1 つ目は IRIS（Instrument for Research Into Second Language Learning and Teaching）というもので，これは L2 research に特化しており，質を保つために査読付きのデータやファイルのみ保存できる。2 つ目は，OSF（Open Science Framework）というもので，その特徴はファイルレベルで作成でき，研究の修正や進展も自動的に記録される。その補足情報は論文が受理された時点で，アクセスが可能になる。このような保存場所を利用し，情報共有することで再現可能性を高めていく必要がある。

次に，広く使用されている SPSS では，頻繁に正確な統計用語が使用されていない問題点，さらにたとえ syntax や output files が提供されても，必ずしも正確な再現ができないケースなどを指摘し，R と R Markdown を使用することによって，情報を再現可能な方法で提供する必要性が議論されている。R Markdown は R code と analysis output を 1 つのドキュメントの中でわかりやすく提示することができ，たとえ raw data を提供できなくても，この R code と analysis output である程度は再現できる。R Markdown では，異なるパッケージや hardware や software を使用してしまうと正確に再現できない可能性もあるため，コンピ

ューターによる同じ環境を作成できる“container”と呼ばれるプラットフォームを使用することで，再現できるとも指摘されている。

最後に，所有権や倫理的理由でデータを共有できない際の解決方法にも触れられている。その方法とは，コンピューターシムレイションによって“simulated/synthetic data”を作成することである。オリジナルのデータと synthetic data の比較は，全体的な類似点をみる general utility とパラメーターの類似点から見る specific utility の 2 つの方法がある。論文内ではオリジナルのデータから synthetic data を作成し，上記 2 つの方法で比較した結果，オリジナルのデータとかなり類似（再現）した結果が紹介されている。

本論文は，再現可能性の重要性，どこにデータを保存するか，R や R Markdown を使用しての情報共有，synthetic data の作成方法など，詳細に，また丁寧に説明されているので，初心者の私でも理解することができた。研究者にとっては，再現可能性は必要な知識なので，非常に参考になる論文である。

評者：古賀　功
(龍谷大学)

JLTA 事務局より連絡
Messages from JLTA Secretariat

JLTAの活動にご理解とご協力をいただき，誠にありがとうございます。ご質問・ご意見等ございましたらお寄せください。

⑴ **2023 年度の全国研究大会**は，東北大学にて対面形式で開催させていただく予定です。開催日は 9 月 9 日（土）―10 日（日）を想定し，調整を進めておりますが，変更となる可能性もございます。大会テーマ，基調講演者，並びに発表申し込みについては今後学会 HP，メール，Twitter 等を通じてご連絡差し上げます。大会の詳細が決まり次第，参加申込みの方法をお知らせいたします。最新情報は，以下からご確認ください。
http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=18
Twitter: @JLTA_official

⑵ 2023 年 3 月 25 日（土）に**第 55 回 JLTA 研究例会**が感染症対策をとったうえで，対面形式で北海学園大学にて開催されました。

【テーマ】分散学習とテスト効果を活用した効果的な語彙の指導と学習
【概要】
最新の理論に基づく語彙の指導と学習，とりわけ記憶から知識を想起（テスト）したり，生徒の知識をテストすることの意義や効果的な方法について特別講演とシンポジウムを行う。参加者との議論も含めて，よりよい語彙の指導と学習の在り方について検討する。
【日程】
受付開始：12:30
開会・趣旨説明・講演者紹介　13:00–13:05 田中 洋也（北海学園大学）
企画 1 特別講演 13:05–14:35
「第二言語語彙学習の効果を高める方法 – テスト効果と分散効果に着目して – 」
講師 中田 達也 氏（立教大学）

（休憩：14:35–14:50）

企画 2 シンポジウム 14:50–16:50
「分散学習とテスト効果を活用した効果的な語彙の指導と学習」
コーディネーター・趣旨説明
笠原 究 氏 （北海道教育大学 HELES Vocabulary SIG 代表）
パネリスト 金山 幸平 氏（北海道教育大

学）
「Random-Selection Tests が L2 語彙学習に与える影響－累積テストとの比較から－」
パネリスト 岩田 哲 氏 （北海道武蔵女子短期大学）
「意図的語彙学習におけるペア・ワークの効果－個別学習との比較から－」
パネリスト 鈴木 健太郎 氏（北海道教育大学）
「個に応じた波及効果を高める語彙テスト形式の提案」
質疑・ディスカッサント 中田 達也 氏（立教大学）

閉会の辞 横内裕一郎（弘前大学・JLTA 事務局長）
閉会 17:00

当日は，大教室を使用し，参加者は座席間隔を空けて着席しました。30 名超が参加しました。今回の研究例会の参加報告については，次号に掲載予定です。また，次回の研究例会については決まり次第お知らせいたします。

(3) **『日本言語テスト学会誌』第 25 号**は 2023 年 3 月 30 日に印刷所から発送されたと報告を受けております。例年より発行に時間がかかったことについてお詫び申し上げます。冊子版の配送とほぼ同時期に J-STAGE https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jltajournal にて公開しています。バックナンバーを含め，ぜひご覧ください。
『日本言語テスト学会誌』は，狭義のテスティングに関するものだけではなく，広く評価に関する**論文を募集**しています。教育実践やプログラム評価に関するものなど，評価全般に関わる実験・知見を含みますので，どうぞふるってご応募ください。

日本言語テスト学会では，2019 年度より「**オンライン投稿審査システム**」を導入しました。このシステムは，2014 年度から学会業務の一部を委託してきた国際文献社が持つもので，投稿と査読の過程がオンライン上に記録されます。さらに，学会誌の一層の質の向上を目指して，既に出版された論文のデータベースを使った投稿論文の剽窃の確認や，著者による論文の匿名化の再確認もシステムの中で行います。2023 年度もこのシステムを使って投稿を受け付けます。詳細は次の通りです。

オンライン投稿審査システムに関する詳細
1．システムのウェブサイト
https://iap-jp.org/jlta/journal/login

2．投稿期間
2023 年 4 月 7 日～2023 年 5 月 7 日

3．学会誌執筆要領・テンプレート
本システムの導入等により一部変更があります。最新の執筆要領やテンプレートをご参照ください。
http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=62

4．問い合わせ先
日本言語テスト学会誌 編集事務局
jlta-edit@bunken.co.jp

(4) **JLTA 研修講師派遣事業**が 2017 年度から始まりました。本事業は，テスト利用・作成に関わる研修を行う機関・団体に JLTA より講師派遣を行うものです。JLTA 研修講師派遣委員会を中心に進めましたところ，2022 年度は新型コロナウイルス感染症の影響か，申

し込みがありませんでした。会員の皆様におかれましては，言語テスティングにご興味のある方々へご周知くださいますようお願いいたします。
ウェブサイト：
http://jlta2016.sakura.ne.jp/?p=929

(5) 本学会ウェブサイトには，Web 公開委員会が公開を進めてくださった，**チュートリアルとワークショップ・ビデオ**があります。どうぞご活用ください。
ウェブサイト：
http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=808

WORKSHOP VIDEO/WEB TUTORIAL

チュートリアル（Tutorial，日本語）

- 「よい」テストの条件（What is a 'good' test?: validity, reliability, and practicality)
- テストの構成概念（The concept of test constructs)
- テスト細目（Test Specification)
- リーディングテスト（Testing Reading-6 basic test formats-)
- リスニングテスト（Testing Listening)
- ライティングテスト（Testing Writing)
- スピーキングテスト（Testing Speaking)
- 語彙・文法テスト（Testing Vocabulary & Grammar)
- 測定の標準誤差（Standard Errors of Measurement)
- 効果量とは？（What is the 'Effect Size'?)
- 学習に役立つテスト結果の報告（Test result reporting to enhance learning)
- 古典的テスト理論（Classical Test Theory)
- 確認的因子分析（Confirmatory Factor Analysis)
- メタ分析（Meta-Analysis)
- 質的方法（Qualitative Methods)

ワークショップ・ビデオ（主に日本語）

2014
- Workshop 1 – CAT の基本的な考え方（スライド）
- Workshop 2 – J-CAT（スライド 1,スライド 2,スライド 3）

2015
- Workshop 1 – テストデータ分析入門（in English）
- Workshop 2-1 – 生徒の力を伸ばす定期テストの作り方―妥当性と信頼性に留意して（スライド）・Workshop 2-2 – How to Develop Tests that Improve Students' English Proficiency（スライド）

2016
- Workshop 1-1 初めて学ぶ効果量－入門編（スライド）
- Workshop 1-2 初めて学ぶ効果量－理論編（スライド）
- Workshop 1-3 初めて学ぶ効果量－実践編（スライド）

2017
- Workshop – テキストマイニングを使った自由記述式アンケートの分析

2019
- Workshop – ベイズ統計とその外国語教育研究への応用（前半）

・Workshop – ベイズ統計とその外国語教育研究への応用（後半）
・配布資料

2021

・JLTA 2021 Workshop – 自律的学習者を育成する中学校外国語科授業の実際（前半）
・JLTA 2021 Workshop – 自律的学習者を育成する中学校外国語科授業の実際（後半）
・配布資料

⑹ **JLTA 最優秀論文賞**

2022 年度の最優秀論文賞は以下の通りに決定しました。

著者：

Rie Koizumi, Yo In'nami（敬称略）

タイトル：

Assessing Functional Adequacy Using Picture Description Tasks in Classroom-Based L2 Speaking Assessment

該当ページ：

JLTA Journal, 25, pp. 60–79.

おめでとうございます。受賞者からのコメントは次号の JLTA Newsletter にてお届けする予定です。

⑺ **JLTA 著作賞の推薦について**

JLTA では 2020 年度より「**JLTA 著作賞**」の表彰を行っています。推薦図書がある場合は，以下のページにある規程・テンプレートをご確認・ご記入の上，著作賞選考委員長へ送付ください。送付先につきましても，以下リンクをご参照ください。

http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=1618

⑻ **2022 年度 JLTA 著作賞受賞者**

2022 年度（第 2 回）の JLTA 著作賞受賞者は以下の通りに決定し，2022 年度の研究大会で授賞式が執り行われました。

受賞者：

（編著者である根岸氏以外は五十音順）

根岸雅史氏　（東京外国語大学）
印南洋氏　（中央大学）
金子恵美子氏　（会津大学）
小泉利恵氏　（清泉女子大学）
酒井英樹氏　（信州大学）
長沼君主氏　（東海大学）

タイトル：

投野由紀夫・根岸雅史（編著）『教材・テスト作成のための CEFR-J リソースブック』(2020 年出版，大修館書店)

⑼ **その他確認のお願い**

● 会員情報や会費納入状況の確認・修正ができる「マイページ」はご利用いただいていますでしょうか。ログインに必要な会員番号やパスワードを紛失された方は以下からお問い合わせください。

https://www.bunken.org/jlta/mypage/Contact

● 所属や書類発送先のご住所など登録情報に変更がある場合，上記マイページにて登録情報の変更を 3 月末までにお願いいたします。**特に，メールアドレス，住所の変更がある場合，確実に変更手続きをしていただくようお願いいたします。**

● 学生会員の方は，毎年学生証のコピーを会員状況確認のためご提出お願いいたします。

● 2021・2022 年度の会費振込について，これからの方は早急によろしくお願いいたします。2021 年度分のお支払いがない場合には，2023 年 4 月より送付物の発送や電子メールの配信がなくなり，マイページの使用もでき

なくなります。

● JLTA 研修講師等派遣事業の名簿について，講師リストの更新を予定しております。2023 年度以降も本事業の講師を希望される方は，下記 URL からアンケートへのご回答をお願いいたします。
https://forms.gle/FQsj2r3Ye1JvFpyXA
回答締め切りは 2023 年 4 月 14 日（金）までとなります。期日までにご回答いただけない場合は大変恐縮ですが，講師リストより削除させていただきます。ご承知おきください。

● 本会の退会を希望される方は，事務局（jlta-post@bunken.co.jp）へご連絡をお願いいたします。

文責：
JLTA 事務局長　横内裕一郎（弘前大学）
JLTA 事務局次長　藤田亮子（順天堂大学）
久保田恵佑（福島県立医科大学）
前田啓貴（松山大学）

日本言語テスト学会（JLTA）公式
Twitter アカウント: @JLTA_official
https://twitter.com/JLTA_official

Messages from the Secretariat

We thank you for your support of and commitment to JLTA's activities. Please send your comments or inquiries. Please see our English website for more details: http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=599

(1) **The 26th JLTA Annual Conference** is scheduled for September 9 (Sat)–10 (Sun) at Tohoku University. The theme, keynote speakers, and presentation registration for the conference will be announced on the JLTA website, e-mail, and Twitter. The latest information can be found at http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=18 or on the official Twitter account (@JLTA_official).

(2) **The 55th JLTA meeting** was held on Saturday, March 25, 2023 at Hokkai-Gakuen University with measures against COVID-19.

Over 30 participants attended the meeting. A report on participation will be published in the next issue. The next meeting will be announced as soon as it is decided.

(3) **The *JLTA Journal* (vol. 25)** was published and sent to members' registered postal addresses on March 30, 2023. Previous volumes were uploaded onto J-STAGE (https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jltajournal). The latest volume (vol. 25) was added.

The *JLTA Journal* invites various types of contributions that include studies related to evaluation in a broader sense, such as classroom-based practice and program assessment that deal with issues and topics on testing and assessment.

We introduced an "**Online Submission and Review System**" from the academic year 2019. This system is organized by the International Academic Publishing Co., Ltd., to which JLTA has commissioned part of its administrative work since 2014. In this system, all submission and review processes will be recorded online. Furthermore, to improve quality of the JLTA Journal, submitted manuscripts will be checked for plagiarism using a database of published articles and for anonymity using human resources.

Details about JLTA Online Submission and Review System

1. Website
https://iap-jp.org/jlta/journal/login

2. Submission period in 2023
We only accepted submissions during the following period:
April 7, 2023 to May 7, 2023

3. Guidelines for Contributors and Templates
The Guidelines for Contributors to the *JLTA Journal* and Templates have been revised owing to the introduction of the system and other changes. Please see and follow the latest guidelines and templates before submission, which are located at:
http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=62 for details.

4. Contact information of the JLTA editing office: jlta-edit@bunken.co.jp

(4) We have been working on the **JLTA Training Lecturer Dispatch project** since 2017, which aims to send a lecturer from JLTA to institutions and organizations wanting to hold training sessions or meetings on test development and use. The JLTA Training Lecturer Dispatch Committee promoted the program, but there were no applications during the 2022 academic year, possibly because of the COVID-19 pandemic. Please feel free to convey this information to those who may be interested.
Website:
http://jlta2016.sakura.ne.jp/?p=929

(5) Our website has various useful contents for the public. Our Web Publication Committee is responsible for the creation and organization of the content. Since some of the content posted is in English, we hope you will use it to the fullest.
Website:
http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=808

WORKSHOP VIDEO/WEB TUTORIAL

Tutorial (in Japanese)

・What is a "good" test?: validity,

reliability, and practicality
・The concept of test constructs
・Test Specification
・ Testing Reading-6 basic test formats
・Testing Listening
・Testing Writing
・Testing Speaking
・Testing Vocabulary & Grammar
・Standard Errors of Measurement
・What is the 'Effect Size'?
・Test result reporting to enhance learning
・Classical Test Theory
・Confirmatory Factor Analysis
・Meta-Analysis
・Qualitative Methods

Workshop Videos

2014 (in Japanese)
・Workshop 1 – Basic Concepts of CAT
・Workshop 2 – J-CAT

2015
・Workshop 1 – Introduction to Test Data Analysis (in English)
・Workshop 2-1 – How to Develop Tests that Improve Students' English Proficiency (in Japanese)
・Workshop 2-2 – How to Develop Tests that Improve Students' English Proficiency (in Japanese)

2016 (in Japanese)
・ Workshop 1-1 Introduction to Effect Size: Basic Concepts and Practices (Beginning Guide)
・ Workshop 1-2 Introduction to Effect Size: Basic Concepts and Practices (Theoretical Guide)
・ Workshop 1-3 Introduction to Effect Size: Basic Concepts and Practices (Practical Guide)

2017 (in Japanese)
・Workshop – An Analysis of Free Descriptive Questionnaire by Text Mining

2019 (in Japanese)
・ Workshop – Bayesian Statistics and its Application to Foreign Language Education Study
・Handouts

2021 (in Japanese)
・JLTA 2021 Workshop – Practice of Junior High School Foreign Language (English) Classes for Developing Autonomous Learners
・Handouts

(6) JLTA determines the winner of **the JLTA Best Paper award** chosen from papers published in the latest issue of the *JLTA Journal*. The award is conferred at the annual conference in the following year. We are pleased to announce the award recipient for the 2022 JLTA Best Paper Award.

Authors:
Rie Koizumi, Yo In'nami
Title:
Assessing Functional Adequacy

Using Picture Description Tasks in Classroom-Based L2 Speaking Assessment

Location:

JLTA Journal, vol. 25, pp. 60–79.

(7) **Recommendation for the JLTA Book Award**

JLTA commenced the "**JLTA Book Award**" event in 2020. If you want to recommend a book for the award, please check and complete the rules and templates on the following page, and send them to the Chair of the Book Award Selection Committee. Please refer to the link below for shipping addresses.

http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=1618

(8) **2022 JLTA Best Book Award**

JLTA determined the recipients of the 2022 (2nd) **JLTA Book Award** and the award ceremony was held at the 2022 JLTA Annual Conference.

Recipients:

Masashi Negishi (Tokyo University of Foreign Studies)
Yo In'nami (Chuo University)
Emiko Kaneko (University of Aizu)
Rie Koizumi (Seisen University),
Hideki Sakai (Shinshu University)
Naoyuki Naganuma (Tokai University)

Title:

"The CEFR-J Resource Book Reference Level Descriptions and Test Development" (2020, Taishukan) edited by Yukio Tono and Masashi Negishi.

(9) **Request for Confirmation**

● Have you visited the "My Page" site, where you can check and modify your membership information and check your yearly membership fee payment status? Please contact us if you need your membership number and password, which are necessary details for login.

https://www.bunken.org/jlta/mypage/Contact

● If you have changes in your affiliation, address, and other information, please update your registered information on "My Page" by the end of March. **In particular, if you have changed your e-mail address or mailing address, please be sure to make the necessary changes.**

● We send student members a message annually asking them to submit a copy of a student certificate.

● If you have not yet paid the yearly membership fee for 2021 and 2022, please do so at your earliest convenience. If you do not pay the fee for 2021, you will receive no shipment or e-mail from JLTA and will not be able to use the "My Page" site after April 2023.

● If you plan to leave JLTA, please let us know by sending a message to jlta-post@bunken.co.jp

JLTA Secretary General
Yuichiro YOKOUCHI
(Hirosaki University)
JLTA Vice Secretary General
Ryoko FUJITA (Juntendo University)
Keisuke KUBOTA (Fukushima Medical University)
Hiroki MAEDA (Matsuyama University)

JLTA Official Twitter account:
@JLTA_official
https://twitter.com/JLTA_official

日本言語テスト学会事務局
〒036-8560 青森県弘前市文京町 1
弘前大学教育推進機構教養教育開発実践センター
横内裕一郎研究室（郵送時には必ず研究室名を明記してください）
TEL: 0172-36-2111（代表）
e-mail: u16yoko@gmail.com
URL: http://jlta.ac

編集： 広報委員会
委員長 古賀功（龍谷大学）
副委員長 土平泰子（聖徳大学）

委員
笠原究 （北海道教育大学旭川校）
長沼君主（東海大学）
宮崎啓 （東海大学）